巻頭言

「リプロダクティブ・ジャスティス（性・生殖・再生産をめぐる社会正義）」の視座を提案する

今号の特集は「リプロダクティブ・ジャスティス（性・生殖・再生産をめぐる社会正義）」である。この概念は日本ではまだなじみがないかもしれない。米国において、リプロダクティブ・ライツ / ヘルスの限界を乗り越えようとする歴史の中で獲得された概念、すなわち、性（sexuality）、妊娠、中絶、出産、子育てを含む人間の性と生殖、再生産にかかわる諸活動を取り巻く構造的不平等を是正することを求める学術及び社会運動の概念である。90年代に米国の非白人女性たちが中心となって提唱し、今は英語圏のみならず韓国などでも使われている。お茶の水女子大学ジェンダー研究所は、2022年米国でロー対ウェイド判決（人工妊娠中絶の権利を認めた1973年の米国最高裁判所判決）が覆されたことをきっかけに、国際シンポジウム「リプロダクティブ・ジャスティス――妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く――」を開催し、リプロダクティブ・ジャスティスという視座に基づく先駆的な議論を行った。本特集にはシンポジウムで基調講演をしてくださったイケモト・リサさんによる、ロー対ウェイド判決が覆された背景やその後の米国社会の動向について論じた示唆に富む論文や、日本の歴史、移民政策、社会運動の側面から現状を批判的に捉えた3人のコメントを掲載した。

ロー対ウェイド判決を覆した2022年のドブス判決は、妊娠・中絶・再生産にかかわる女性の自己決定権や、それを保障するための医療や公的サービスの後退を決定づけた。すでに保守的な州では人工妊娠中絶を厳しく制限する規制が始まっており、とりわけ経済的に困難に陥っている女性や、社会・文化的に脆弱な立場に置かれているマイノリティに、重大な負の影響をもたらしている。

振り返ってみると、歴史上女性のからだや再生産能力が女性自身のものであったことはない。女性のからだは常に、近代国家や家父長制、資本主義のような権力体制が、性と生殖に基づく再生産能力を占有するために争う「バトルグラウンド」であった。その争いには、ジェンダーのみならず、民族、階級、障害、セクシュアリティなどによる構造的不平等が交差しており、女性たちは分断させられ、時には激しく対立もした。

20世紀前半に世界を風靡した優生思想はそのような権力の欲望を勢いづかせることになった。優生思想は人種差別を一層制度化し、貧困層を国家の質を落とす集団として選別して、彼らの生殖能力を抑制、排除していく暴力的な公共政策を正当化した。女性の妊娠・出産・再生産能力は国民の質の改善のための道具とみなされ、人種、階級、民族、障害などに

よって異なる人口政策が施された。例えば、母子を支援するために創設された大恐慌時代の社会福祉プログラムは事実上「価値のある」白人未亡人とその子どもを対象にした。白人の女性は国家のために産むことを期待され、不妊施術も滅多に許されなかったことに対して、黒人や移民、先住民族の女性たちは、人口抑制のための避妊を奨励されたり、福祉プログラムからも切り捨てられがちだった[1]。これらの優生学的な考え方は未だに移民政策など様々な政策に、連綿と引き継がれている。

このような歴史を背景に、白人中産階級の女性たちは妊娠中絶を自ら決められる権利を国から勝ち取ることを優先事項として闘い（リプロダクティブ・ライツ）、その成果として得られたロー対ウェイド判決は、妊娠・出産を個人のプライバシーに関わる私的な事柄であるとして、その自己決定権を認めたものであった。しかしその後、公的な医療サービスが縮小され、リプロダクティブ・ヘルス・サービスの市場化が進むと、市場でサービスが買える中産階級の女性たちは自己決定の権利が行使できるようになったが、そのほかの貧しい女性たちにはその選択の自由はなかった。「選択する権利」や「私人のプライバシー」といった自由主義的な概念がもたらしうる限界である。それに対してリプロダクティブ・ジャスティスの視座は、人種や階級、障害などによって、性と生殖、再生産をめぐって明らかに異なる経験を強いる構造への問題提起を呼びかける。

今号のイケモト論文ではリプロダクティブ・ライツ / ヘルス / ジャスティスの三つの概念について丁寧に紹介されているのでぜひお読みいただきたい。三つの概念はそれぞれの歴史を背景に生まれてきたもので互いに排除しあう概念ではないが、リプロダクティブ・ジャスティスの視座を提案したいもう一つの理由は、子どもを産み育てる「親になる権利」の実現を訴えている点にある。経済的な困窮や在留資格の有無、未婚の母だから、などの理由で子どもを諦めざるをえない女性がいる中、子どもを安全で健康的な環境の中で育てる権利が一部の人たちの特権になりつつある。リプロダクティブ・ジャスティスの視座はそれらの構造的不平等に目を向けさせて、適切な性教育から子どもと一緒に生活ができるに足る賃金の確保まで、再生産領域全般に対する見直しを訴えかける。

リプロダクティブ・ジャスティスの視座が切り開いた可能性は韓国の女性運動のパラダイム転換からも垣間見られる。日本の刑法の影響を受けて堕胎罪が定められていた韓国では、女性たちの強力な運動によって、2019年に刑法堕胎罪に違憲判決（憲法不合致）が下された。少子化が進むことを阻止しようと、国家が中絶に対する規制を強めようとした動きに対して、障害をもつ女性たちを中心とする若い世代や医療従事者などの専門家らが連帯し、堕胎罪廃止運動を精力的に展開した結果だった。この過程で、「生命か、女性の選択か（pro-choice or pro-life）」、という虚構の対立を拒んで、女性も胎児も国家によって健康を脅かされると主張し、人工妊娠中絶の非犯罪化を勝ち取った。

1　Loretta J. Ross and Rickie Solinger, *Reproductive Justice: An Introduction*（2017, University of California Press）.

日本においても「リプロダクティブ・ジャスティス」のアプローチが持つ有効性は明確ではないか。日本でも、妊娠・中絶・再生産をめぐる長い闘いの歴史がある。しかし性と生殖に関する自己決定権は、それが誰にでも保証されるべき基本的人権である、という考え方がいまだに確立されていない。刑法堕胎罪も現存しており、配偶者の同意がなければ中絶が儘ならないこともある。2023年4月にようやく経口中絶薬が厚生労働省によって承認されたが、配偶者の同意に加えて高額な自己負担や入院または病院内待機が課せられるとされ、妊娠中絶のハードルは依然として高いと予想される。「選択肢」が増えるとはいえ、その選択肢を手に入れられない人たちが多く存在するのであれば女性の間にさらに分断と格差が生み出され、社会正義は得られない。

誰もが自分のからだを自分自身のものとして取り戻し、基本的人権として性と生殖の自由な選択ができるためには、女性やマイノリティに対するあらゆる差別と闘う必要がある。そのためにリプロダクティブ・ライツあるいはリプロダクティブ・ヘルスというアプローチのみならず、個々人のライツやヘルスの保障を阻む社会的環境や、不平等を生み出す構造、そのものについて目を向けなければならない。

シンポジウムで問いかけた、妊娠・中絶・再生産の自己決定を（不）可能にするものは何か、法・政治・社会運動はどのようにそれに関わってきたのか、という問いに対して、「リプロダクティブ・ジャスティス（性・生殖・再生産をめぐる社会正義）」の概念を切り口として、今後も多角的に議論していきたいと考える。

最後にリプロダクティブ・ジャスティスの日本語翻訳について言及しておきたい。特集のコメントを寄せてくださった大橋由香子さんが指摘するとおり「正義」という日本語は、その語感から必ずしも英語の「ジャスティス」の持つ本来の意味を正確に伝えるものではないかも知れない。同様の理由からなのか、近年翻訳されるフェミニズム書籍がキーワードの日本語訳を深く思索するよりカタカナのまま使う傾向があるように思われる。翻訳語の選択は、その概念がもつ意味をどのように解釈すべきかに対する立場を表すことでもある。ここではジャスティスを敢えて日本語に翻訳して、過度に男性化された「正義」の概念をフェミニズムが取り戻すことを試みたい。カタカナと日本語意訳を併記して「リプロダクティブ・ジャスティス（性・生殖・再生産をめぐる社会正義）」と提案する。

2023年7月1日

編集長　申琪榮

contents

ジェンダー研究　第 26 号（通巻 43 号）　2023 年

1　巻頭言　申 琪榮

特 集

リプロダクティブ・ジャスティス
妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く

研 究 論 文

7　Reproductive Justice in the U.S. After *Roe*
Lisa C. Ikemoto

コ メ ン ト

33　「正義」の正しさと厄介さ
大橋由香子

39　一時的移民プログラム下の移民女性の滞在権とリプロダクティブ・ジャスティス
髙谷幸

43　1920 ～ 30 年代における〈産む主体〉に対する「量」と「質」からの介入
宝月理恵

投 稿 論 文

49　フェミニスト社会科学の科学性と政治性――フェミニスト認識論の統合的理解に即して
小野寺研太

69　フェミニズム理論における連合・連帯の規範的構想 ――
ナンシー・フレイザーとアイリス・マリオン・ヤングの議論から
山岸大樹

89　Influence of Mothers on Occupational Expectations of Female University Students in Japan:
A Comparison with the UK
Kaori Miyamoto

111　「拒食症のドラマ」の精神分析 ――
スティーヴン・レヴェンクロン『鏡の中の少女』における身体イメージの歪み、眼差し、欲望
大木龍之介

書 評

128　柘植あづみ『生殖技術と親になること　不妊治療と出生前検査がもたらす葛藤』みすず書房
洪賢秀

130　小浜正子・板橋暁子編『東アジアの家族とセクシュアリティ　規範と逸脱』京都大学学術出版会
熱田敬子

132 工藤晴子『難民とセクシュアリティ　アメリカにおける性的マイノリティの包摂と排除』明石書店
永井萌子

134 鳥山純子『「私らしさ」の民族誌　現代エジプトの女性、格差、欲望』春風社
齋藤剛

136 杉田映理・新本万里子編『月経の人類学　女子生徒の「生理」と開発支援』世界思想社
佐野麻由子

138 ショーン・フェイ（高井ゆと里訳）『トランスジェンダー問題　議論は正義のために』明石書店
葛原千景

140 キャスリーン・M・ブリー（鈴木彩加訳）『レイシズム運動を理解する　理論、方法、調査』人文書院
梁英聖

142 玉城福子『沖縄とセクシュアリティの社会学
ポストコロニアル・フェミニズムから問い直す沖縄戦・米軍基地・観光』人文書院
佐喜真彩

144 新潟県立近代美術館・国立国際美術館・東京都現代美術館編『Viva Video! 久保田成子』河出書房新社
原口寛子

146 禿あや美『雇用形態間格差の制度分析　ジェンダー視角からの分業と秩序の形成史』ミネルヴァ書房
佐藤直子

148 レスリー・カーン（東辻賢治郎訳）『フェミニスト・シティ』晶文社
岡本優加子

150 池田弘乃『ケアへの法哲学　フェミニズム法理論との対話』ナカニシヤ出版
王嘉若

152 藤高和輝『〈トラブル〉としてのフェミニズム 「とり乱させない抑圧」に抗して』青土社
山田秀頌

154 大野恵理『「外国人嫁」の国際社会学 「定住」概念を問い直す』有信堂
澤田佳世

156 安井眞奈美『狙われた身体　病いと妖怪とジェンダー』平凡社
久島桃代

158 Rika Saito『The Language of Feminine Duty :
Articulating Gender, Culture, and Covert Policy in Modern Japan 』Peter Lang
中村桃子

160 Nancy Folbre『The Rise and Decline of Patriarchal Systems: An Intersectional Political Economy』Verso
中村雪子

162 編集方針・投稿規定